

登校拒否児とレクリエーション

—— 宮坂先生の研究発表を聞いて ——

犬 飼 己紀子

宮坂先生の発表をお聞きし、表面には現われてこない現代社会の歪みを現実の問題として参加者の1人1人がとらえる事ができたと思います。それと同時に増える情緒障害児問題を身近に感じ、彼等を抱える家族や学校、施設内だけの問題とするのではなく、我々自身の問題として対応していかなければならないと感じたのは私1人ではなかったと思います。

原峠保養園においては、その主とする療法を作業を進める中で行ない効果を上げていらっしやるとの事でしたが、ここで私はレクリエーション活動を通じて治療をより効果的にしていこうとする実践報告をご紹介しますと思います。

子どもにとって遊戯は欠かせないものである事は述べるまでもありませんが、子どもに限らずとも遊びは人をその社会的緊張から開放し、新たな創造を生み出す活力を養い、積極的休養ともいえる心身のやすらぎをもたらしてくれるものです。この遊びをレクリエーションと言います。

山梨県児童相談所では通所治療している小学校、中学校に在学する情緒障害児(主に登校拒否)とその保護者に対し、その非社会的行動から集団適応性の増大を図る事を目的とした、4泊5日のキャンプ合宿を昭和49年より実施しています。遊戯療法を始めとする種々の心理療法的技法によって先の目的に働きかけようとするこのキャンプは、回を重ね参加してもらうごとにその効果が得られるようになっているそうです。

健常児に向けてのキャンプとの大きな違いは治療スタッフが子どもの数をはるかに上回る大がかりなものとなる事で、その1人1人がそれぞれの専門を生かしての

実践となっています。

効果を上げているこのような実践報告を真似ていく事はとても困難な事だと思いますが、しかしこれを参考に、情緒障害児とレクリエーションとの問題をさらにおし進めていくことができると思います。

このようにレクリエーションを治療に役立てるという報告がされた例は少ないのですが、各病院、施設においてリハビリテーションの意味を含めてのレクリエーション活動を行ない効果を上げているところは少なくはないと思います。そういった意味でのレクリエーションが、レク専門家の手で計画的に実践されていったならば、その治療に役立てる効用も一段と増すのではないかと考えるのです。

現在、アメリカにおいては、セラピューティックレクリエーション(Therapeutic Recreation, 略してT・R, 治療的レク)が資格制度化され専門職として病院、各種施設に置かれ、実践されています。そしてその資格取得の為の教育機関として1951年にミネソタ大学等で専門科目としてT・Rの講義が取り入れられるようになったのを始めとし、1973年には70の単科・総合大学にT・R専攻コースがあり、17の短大でもコースが開設されているとの事です。レクリエーションに多少の興味を持つ私にとっては、実にうらやましい事です。が、目前にある現実を飛び越す事はできません。日本でも見直されてきつつありますが、未だ軽視されがちなレクリエーションを正面から見つめ直し、障害者への治療的レクリエーション、又健常者への予防の意味でのレクリエーション活動を進めていきたいと願っています。

<参 考>

「セラピューティック・レクリエーション入門」 C・S オモロウ著

不昧堂

「レクリエーション」 1981. 12 日本レクリエーション協会

(上田女子短期大学講師)